三一新書 570

小説楠木正成

青雲篇

邦光史郎著

三一書房

小説 楠木正成

青雲篇

邦光史郎 著

邦光史郎
くにみつしろう

1922年　東京に生まれる
著　書　『社外極秘』（三一新書）『色彩作戦』（三一新書）『欲望の媒体』（三一新書）『負けるが勝ち』全三部（三一新書）『泥の勲章』（講談社）『仮面の商標』（ポケット文春）『重役紹介会社』（三一新書）『泥の箱』（カッパノベルス）『シャドウマン』全三部（三一新書）『西陣模様』（三一書房）他

小説 楠木正成 青雲篇　　定価 270 円

1967年4月21日　第1版発行

著　者　© 邦光史郎
1967年

発行者　竹村一
印刷所　同興印刷株式会社
製本所　熊倉製本所
発行所　株式会社 三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京 (291) 3131~5番
振替東京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　　三一新書 570

小説 楠木正成

青雲篇

邦光史郎 著

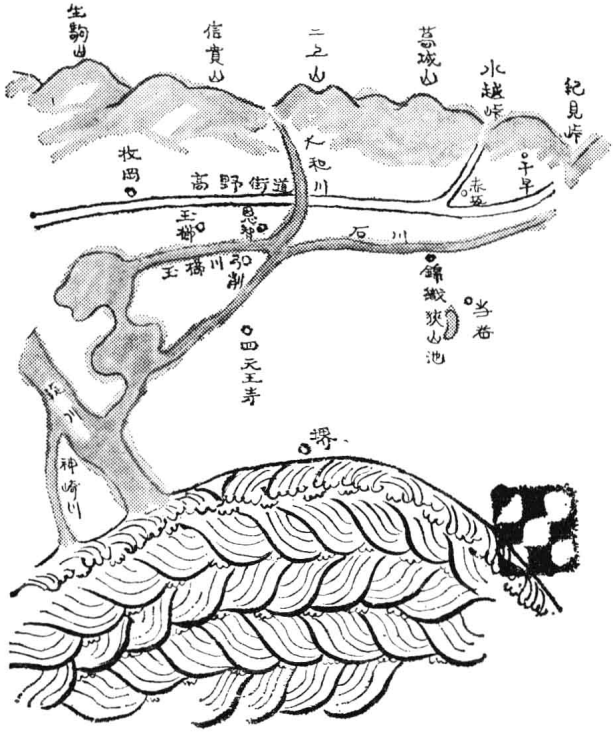
试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

小説

楠木正成

青雲篇

河内之國圖


生駒山
信貴山
二上山
葛城山
水越峠
紀見峠
千早
赤坂
大和川
牧岡
高野街道
玉櫛
恩智
石川
河内川
錦織
狭山池
当麻
四天王寺
堺
神崎川

散所屋敷

月に一度、いつもきまって河内の楠木入道は、水分の屋形を後にして石川を下り、玉櫛散所屋敷へと出かけて行った。

だが珍しくその時は多門を連れて行くと言い出した。

「いずれは汝もわしの跡を取るのやからのう」

それはどこの父親でも伜に言いそうなことだったが、どうやら母親は、多門が同行することをあまり好んではいない様子だった。

「そなた明日は観心寺の滝覚御坊とお約束があるのではありませぬか」

遠廻しに牽制していたが、父親は顔をそむけて鼻毛を抜いていた。

そのくせ、いざ出かけるとなると、さも役目柄しかたなく旅立つのだという様子を示して、

「どうもこの風の生温さが気に食わん。こりゃ夕景にはどうやら一雨きそうじゃわい」

いかにも渋い顔つきで見送りに出た妻の顔を振り返ったものだった。

ところが駒足が次第に垣内から遠去かり、やがて錦織の舟つき場までやってくると、たちまち掌を返したようにからりと上機嫌に変っていた。

「これはお屋形さま、よいお天気で……」

出迎えた船頭にも、さっそく祝儀をはずんで川舟に乗り込んだ。

「さアやっちょくれ。三五の小娘に棹さすみたいにぼちぼちやらんと、わしの伴みたいに勢ようやるのじゃぞ」

河内男のつねで、口こそ悪いが、その眼は糸よりも細く和んでいる。

その上いつになく新調の直垂を着込んですっかり若やいだ様子なのである。

やはり下人たちが噂しているとおり、玉櫛の庄に隠し女がいるのだろう。

だが一体どうしてそんな所へ自分を連れて行く気になったのだろうか。それがどうも多門には解せなかった。

入道正遠は、石川の流れに浮かんだ舟の上にごろりとからだを横たえると、やがて太短い丸太のような身体つきに似合わぬ優し気な声を張った。

「花の錦の下紐は、解けてなかなかよしやな。柳の糸の乱れ心、いつ忘れようぞ、寝乱れ髪の面影……」

低く唱うその小歌ぶりにも、弾んだ男心がどことなく滲み出ているようであった。

これが七人の子をもつ父親の姿なのだろうか。しかし、このいかにもいそいそと若やいだ老童の姿はどうも憎み切れない。どうやら本人は、三十路の昔に戻った気でいる様子だが、その下腹の張り具合といい

頬のたるみといい、どこから見ても厭らしい五十男の顔は隠しきれなかったのである。
おかしな親父殿だな。
多門は笑い出したくなる心を抑えて、船首近くに坐りながら、二つ引の直垂を着てめかし込んでいる父親の姿をぼんやり眺めやった。
母と娘とは、それこそとぎれ目もないほど語り合うが、父と息子との間に対話は至ってすくないものなのである。
一方父親の入道正遠は、いつまで経っても一向に口髭の濃くならない息子の姿を上眼使いにちらちら見やって考えた。
いったいこれでもこいつは一人前になったというのだろうか。
もう十九歳になるというに、女を姙ませてくるどころか、いまだに遊び女から声をかけられると、顔を赧らめて逃げ廻っている始末なのだ。
情ない。これではとても悪党河内の楠木入道の跡は取れぬ。これというのもやはり上五人たてつづけに女ばかり生まれた、その挙句の果てにようやく儲けた男子であるためかもしれない。
それとも暇さえあれば寺詣でばかりしている母親の感化を受けたからであろうか。
「多門、そちも玉櫛の庄へ帰るのは久し振りじゃろう」
白い蝶が水を渡って舞っていた。
野も山も燻蒸したように睡たげな風情であった。
「汝の母親は赤坂の生まれやから、そりゃ水分の屋形住いが性に合うのじゃろうが、わしはどうも玉櫛

の方が気楽でのう」

入道正遠は、同じ男同士だという気安さからついそう言ったのだろうが、多門は、汝の母親と言われたことにやはりこだわりを示した。

父に似て身体はそう大きい方ではない。色白でぽってりと下ぶくれした顔立ちは、むしろ母親の血をより濃く引いているようであった。

だが、いくらか顎が張っていて、重たげに脹れぼったい瞼をしているのは、父親似というよりは、むしろ河内男の特徴ともいえるものだった。

そう言えば、むかしこの錦織の里には何千人という百済や呉の男女が移り住み、養蚕や絹織物の仕事に励んで、大層賑わったということである。

だから河内男は、どこか大陸めいているという人がいないでもない。

けれどそんな風に帰化人の血が混じっているのだと言い出せば、大和だって京都だって実はもっと混血であるかもしれないのだ。

どちらにせよ、そんなことはずっと古い昔話にすぎないのだ。

「どれ今のうちに一睡りしておくか。さもないと今夜は無事に睡らせてもらえそうにないからのう」

ぬけぬけとそんなことを言ってのける父親なのだ。だが野放図なのは表面だけ、内心は至って気の小さい入道でもあった。

どうせわいらは河内の悪党や。何かというとすぐ悪党風を振り廻してはいたが、ありようは、悪党の旗印を掲げることによって、地頭や近隣の土豪たちの侵略から所領を守ろうとしたまでのことなのだ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

これがもし鎌倉方の御家人の端くれに加わっているとか、もしくは中央貴族の領地である荘園（私有地）の雑掌（荘官）であったなら、すくなくとも左衛門ノ尉とか兵衛ノ尉というような官位を貰って、それを自分の名乗りに加えることができたのであるが、所詮そうした権門とは無縁の一土豪であったため、やむなく頭を丸めて入道と号さなくてはならなかった楠木正遠にとっては、やはり悪党の称号を欠かすことができなかったのだろう。

だがどうやら一生このまま無事にすみそうだった。

若年の頃には、播磨の国大部庄の雑掌（荘官）を勤めて、本所（領主）である東大寺に敵対したこともある入道正遠だったが、それもすでに遠い日の追憶になってしまった。

ところで、わしはこのまま悪党と呼ばれ、河内の一土豪として生涯を果てても一向に悔ゆる所はないのだが、一体この多門はどうする気でいるのだろうか。

悪党にもなれず、さりとて官位も望めないとあっては、とても所領を守って行けそうにはない。

そうでなくても、地頭や隣国の武士団が、豺狼のように爪を磨いで待ち構えているのだ。

やはりこうなれば一刻も早く、これという頼り甲斐のある本所を見つけて、その社寺か公家に一たん土地を寄進した形式をとり、保護を仰いで所領を安堵してもらうのが一番賢明な方法であるに違いない。

何しろ赤坂の所領は、玉櫛の庄のように散所ではなく、立派な田地なのである。だから、うっかり玉櫛の庄の本所（領主）である宇治の平等院へ頼んだなら、たちまち取り込まれてしまう恐れがあったのだ。

これでなかなか安閑とは暮しておれぬ世の中なのだ。

入道正遠は、とつおいつ考え耽りながら薄眼をあけてみた。

双膝を抱え込んで息子の多門は水の流れをぼんやり見詰めている。
和泉や葛城山の水を集めて流れるこの石川は、付近随一の大川ではあるが、赤坂の里で生まれた多門にとっては、さして珍しかろうはずはない。
どうもこの息子だけは、何を考えているのかさっぱり摑まえ所がない。よく言えば鷹揚、悪く評すればどこか間が抜けていて怯懦なのだ。
やはり土豪の伜に余計な学問などさせるのではなかったな。
入道はその柔弱ぶりが歯掻ゆくてむずむずしてきた。
だが、その時多門が見詰めていたものは流れ行く水でも、その水面に映る空の青でもなかった。
彼は、ふと弁信優婆塞（半俗の僧）の眼の色を思い出していた。
蒐色に光る厳しい眼射なのだ。
——あの御坊は何もかも変っている。僧とも言えず、かといってむろん俗界に立ち戻れる人ではない。それにあの人は、いつも眼前の事象を眺めているのではなく、たえずその内側を見通そうとしている。だからあの人に出会うと、人はみな自分の心を読まれまいとしてあわてて心を閉ざしてしまうのだ——
多門が弁信優婆塞と出会ったのは、金剛山寺の宿坊に泊った時であった。
その寺は、いま多門が舟を浮かべているこの石川と平行して走る金剛山脈の一番高い峯の上にそびえていた。
南河内と大和との国境をなしているその山脈は、当時、葛城の峯々と呼ばれていたものなのだ。
高さ三百丈と称され、峯の頂き近くに、役の行者の開基と伝えられる一宇があった。

修験道の根本道場の一つに数えられていたので、その宿坊には多くの山伏験者が泊っていた。
だが、多門は、父の入道正遠が、そうした山伏たちの旦那（金主）になっていたので、特に宿泊を許されたのである。
山伏のことを験者と呼んでいたが、それは、真言（呪文）を唱えることによって祈禱や加持を行なう半俗の僧たちを意味している。
こうした験者たちが通常高峯を巡歴するのは、すこしでも高い山に登ったなら、それだけ神に近づけると考えた原始宗教が、やがて仏教と結びついたゆえであり、修験道そのものが、やがて山岳仏教として特殊な発達を遂げたからでもあった。
けれど弁信は、もともと加持祈禱よりも予言を好んだ。
験者という者は多少なりとも神秘めかした予言を行なったものなのだ。
「わしは、実を言えば神仙術に憧れてこの道に入った異端者なのじゃ」
役の優婆塞のごとく、自在に空中を飛行したいと少年らしい夢を抱いて験者を志望したのだと打明けてくれた。
また弁信はこうも語っていた。
「われらの開祖は六神通を会得しておられた。千里の先をも見通す天眼通力、千里の遠方の物音を聞き分ける天耳通力、他人の心を読み取る他心通力、前世の出来事を知る宿命通力、時間空間を超越して往来し得る神足通力、人間の煩悩の塵のすべてを拭い去る漏尽通力。この六つじゃ。そのうちわしはようやく一つだけ自分の物になし得た通力がある。何か分るか」

むろん多門は首を振るよりしかたなかった。
「他心通力、これじゃ。しかし、他人の心など読み取ったところで、おのれの足しになどなりはせん」
その時すでに弁信は、大峰・葛城・熊野の三峰をきわめつくして、叡山・高野山を経めぐってきた直後であったが、これから信濃の御岳・立山・越前の白山などを廻ってみるつもりだと言っていた。
その次出会った時には、ちょうど出羽の羽黒山から帰ってきた矢先であった。
「帰途、日光の二荒山に立寄って、それから鎌倉へ廻ってきた」
日本全土を踏み歩くのだという気概が汗くさいその衣に滲み出ていたのである。
しかし、昨年落会った時、弁信は悲し気な眼の色をしていた。
どこどこを回国してきたのかと問うと、
「伯耆の大山から、備前児島郡に住む児島山伏たちをたずねて参った」
一年がかりで、たったそれだけのことしか体験してはこなかったらしいのだ。
そのためか、弁信優婆塞の衣にあのいつものような饐えた汗の匂い、は浸みていなかったのである。
「六道に輪廻するよりも、わしは不生を願いたい」
ぽつんとそう言って弁信は遠くをすかし見るような眼つきをした。
人間というものは、死後、畜生に生まれ変り餓鬼になりして六道に転生するが、再び人界に相会することは稀れであるという。だからふたたび生まれ変ることのない、すなわち不生を願うというのであろうか。
弁信は、不審を浮かべて自分をみつめている多門の面上をしばらくみつめていてこう言った。
「おぬし凶相が現われておるぞ」

多門は声もなく弁信を見つめ返した。
「破兆がある。肉親の縁薄く、寂莫煩悶逆境の凶相を負うて行かずばなるまい」
だが、そこまで聞くと多門は笑みをこぼした。
「構いませんよ、私は……」
「どうやら信じてはおらぬようだな」
弁信の声にも自信が失われていた。
「どうせ何としても最後は死ぬだけですから……」
「しかし、その覚悟も、不生なればこその話だな」
たしかに、二度と生まれてこないと分っていればこそ、容易く死に就けるのであるが、もしこれが畜生界に生まれ変ると分っていたのなら、誰しも最後は死ぬだけだとは言いきれまい。
「ところで、御房はこれからどこへ行かれるのですか」
「わしか、もう一度、備前の児島へ帰らずばなるまいな」
どうやらそこに女人の縁が生じたらしいのだ。
果して今年も、弁信優婆塞は金剛山の峯へやってくるのであろうか。
おぼろに薄光る葛城、金剛の峯々の向うに、二上の雌雄岳がまろやかな連なりをのぞかせはじめて、舟はようやく大和川との合流点にさしかかった。
生駒山系と葛城山系の相接する切所を割って、大和の諸水を集めた大和川が流れ出ている。

だがその柏原の地で、大和川は和泉葛城の水を乗せて北流してくる石川とぶつかり、そのまま西の海へは注がず、こんどは方向を北へ転じて、一つは生駒山麓と上町台地の間を通る玉櫛川となり、また一つは上町台地の西側を流れる後の久宝寺川となって、いずれも北河内に待ち受けている巨大な沼沢地に吸い込まれ、そしてその末は淀川に通じていたものなのである。

そのために浪速の地はいつまでも水潰く葦原のまま捨て置かれ、生駒山系と上町台地に挟まれた低地帯は、たえず洪水の恐れに怯えていなくてはならない湿潤の盆地をなしていた。

ところで、河内とは、北の淀川と、大阪平野を南北に貫いて走る旧大和川との間に挟まれ、東を生駒山系によって限られた、河の内側の地を指して言う地名であったという説がある。

また、河内とは、すなわち河地であって、いく筋もに枝を張って川筋さえはっきりとはしない玉櫛川の沿岸を示す地名だとも言う。

古くは河内村であったものが、やがて郡の名称となり、次第に時代が下ると共に一国を現わす地名にまでひろがってきたと説く人もある。

河内の諸川は暴れ河であった。

弘安十年（一二八七年）五月十日、霖雨やまず諸川は増水して氾濫を起こした。

ちょうど玉櫛川が久宝寺川と岐れるあたりに弓削の庄がある。

かつては弓削の道鏡という怪僧を生んだ地であるが、ここもまた帰化人たちによって開かれた里なのだ。

この弓削の庄の隣に位置する玉櫛の庄は、宇治平等院の荘園（私有地）であったが、弘安十年の洪水に田畑を押し流され、いまは耕す人もない荒れ地になっていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong